



てこな ミューズ ジャーナル

Tekona Muse Journal

2005年3月号

市川市文化振興財団公式ホームページ「てこなどっとねっと」 <http://www.tekona.net/>

特集

2/7 市川市文化会館音楽講座・最終回レポート

連載

「音楽を愛する作家たち」第2回

～ヘルマン・ヘッセとヘッセの愛した音楽～

市川市文化会館 能村館長・今月の一句

卒業子 等身鏡より 出発す

文化庁助成金による無料音楽講座・最終回

2/7(月)新日本フィルハーモニー交響楽団メンバーによる室内楽レポート

昨年9月から始まった市川市文化会館音楽講座も今回で4度目、最終回を迎えました。いずれも大変に好評でしたが、今回は新日本フィルのコンサートマスターであるチェ・ムンス氏らによるモーツァルト・フルート四重奏曲、ドヴォルジャーク・弦楽四重奏曲などの演奏でした。

【初めての試み】 無料音楽講座全4回は、(財)市川市文化振興財団主催事業でしたが、これまでにない試みをいたしました。文化芸術アドバイザー小坂裕子が曲目解説を書き、それを使って演奏前に簡単な作品紹介をいたしました。さらに演奏家の方々が演奏の合間に、作品への思い、楽器のこと、または日々のできごと、あるいは趣味など、さまざまなことをお話ししてくださいました。アンケート結果にも、舞台と客席の距離が近くなったと好評の声を数多くいただきました。



【2月7日新日本フィルメンバー・本番の様子】

連載

<音楽を愛する作家たち>

第2回 ヘッセが愛した音楽



4月8日(金)から5月22日(日)

まで、市川市芳澤ガーデンギャラリーにて

「画家と詩人 ヘルマン・ヘッセ展」

が開催されます。

ヘルマン・ヘッセ(1877-1962)

ヘルマン・ヘッセは、ドイツ南西部に広がる「黒い森」シュヴァルツヴァルトの北に位置する人口2万3000人ほどの街カルフで、1877年に生まれました。『車輪の下』などの名作でわが国にも愛読者が多いノーベル賞作家で、その作品の舞台となるカルフへの真冬の最新紀行は、写真付きで次回お伝えすることにします。

ヘッセの水彩画

ヘッセは油絵は描きませんでした。精神的に不安定になった40歳ごろに水彩画を精神分析医からすすめられて描き始めたと言われています。

でも展覧会にいらしてごらんになると分かりますが、どれも自然や空間を伸びやかに描いたものばかりで、色彩も澄み切っていて、心が洗われるような気持ちになります。

ヘッセの絵は彼が心の葛藤を抱えていた人のものとは思えないほどに明るく、風のさわやかさすら感じられるのです。



ヘッセが愛した音楽

そんなヘッセが音楽ファンだったと聞いたら、どんな音楽が好きだったのか、知りたくありませんか？ ヘッセは彼自身、ヴァイオリンを弾いたようですし、音楽会へ行く楽しみを雑誌に寄せた文も書いています。

ヘッセは彼自身の水彩画と同じように、華麗で派手な音楽を好みませんでした。

例えば54歳で書き始めた<ガラス玉遊戯>という小説があります。その内容を一言で説明するのは、あまりにも難しいのですが、ちょっとその冒険を試みましょう。

<ガラス玉遊戯>は、主人公クネヒトが音楽と数学を基礎にした学問的極地に達し、名人となって理想郷を出て、その教えを説きに世間に出ていくといった物語です。

この物語のテーマはヘッセの終生の題材である「自己を見つめる」です。

音楽をその文学の基盤におくヘッセ

主人公のクネヒト少年がラテン語学校の生徒であったとき、音楽名人が学校へ視察に来ることになった出来事が書かれています。その音楽名人が学校を訪れた日、クネヒトは手や指をきれいにし、髪にくしを入れて、ヴァイオリンと楽譜を持って音楽室で待っているように言われました。

入ってきたのは、静かに輝く落ち着いた朗らかさのある白髪の男性でした。ピアノの前のイスに座ると、『一緒に音楽をやろう』とクネヒトにやさしく話しかけたのです。

少年はやがてこの老人からバッハのフーガについて学んだりするのですが、音楽名人であるこの老人は、『音楽をしている時ほど、ふたりの人間がたやすく友だちになれることはないよ。それは美しいことだ。君とわたしはいつまでも友だちでいられるだろうね』とクネヒトに言いました。

この場面は音楽への共感、それを抱ける人同士の出会いの神秘を語っていて非常に印象的で忘れられません。

ヘッセはバッハを愛していた

ヘッセはバッハに何を感じていたのでしょうか？ヘッセの書簡の中に「バッハは繰り返し繰り返し、憂愁に満ちた内向の深みから、神の、宇宙の秩序に戻ろうと戦い続けていた」とあります。この言葉が意味するものは何でしょうか？

ヘッセのテーマは「人間とは？」「人間であることとは？」だと思います。小説『デミアン』では主人公「ぼく」が、金を盗むなど悪を経験し寄宿舎で自堕落な生活を送ったりしながら、もう一人の主人公「デミアン」の助けによって少年から青年に成長していく過程が描かれていきます。そんな場面展開の中に、主人公と音楽の出会いが描かれます。

主人公は青年に成長したある日、たまたま通りかかった教会から聞こえてくるバッハのオルガン曲に耳を奪われました。

バッハの音楽には「宝物」が封じ込められていて、オルガン弾きはまるでその宝物を手に入れようと、その演奏はあたかも祈りのようだったとあります。ヘッセはバッハの音楽に、個人を越えていく永遠なるものを聞き取り、書簡にあるように、まさに「憂愁に満ちた内向の深みから、神の、宇宙の秩序」への高みに上っていくかのような感動をいただいていたのでしょう。

(参考文献：ヘッセ著『ガラス玉遊戯』『デミアン』、フィルカー・ミヒェルス編著『ヘルマン・ヘッセと音楽』)

画家と詩人 ヘルマン・ヘッセ展

4月8日(金)～5月22日(日)

市川市芳澤ガーデンギャラリー

9:30～16:30(入館は16:00まで) 毎週月曜日休館

入場料/一般600円 高・大学生400円 小・中学生200円

シルバー(65歳以上)・ローズメンバーズ400円

会期中には、「ヘッセと蝶」「ヘッセと音楽」「ヘッセの詩を演奏つきで朗読する」など興味深いレクチャーが用意されています。

今回のヘッセの水彩画展は、単に作品の展示だけではありません。「水彩画を楽しむ」を出発点に、ヘッセの文学、その音楽への思いなど、ヘッセの芸術とその人物像への理解をより深めたいという、とても欲張りな企画になっています。

新緑美しい芳澤ガーデンギャラリーで、このようなヘッセの水彩画とヘッセにかかわるさまざまな資料、展示物、そして興味深いレクチャーがみなさまのお越しを待っています。

美術界およびヘッセ文学を愛する方々からも注目され、すでに新聞にも取り上げられています。全国数箇所で開催される「画家と詩人 ヘルマン・ヘッセ展」の最初の開催場所として、市川市芳澤ガーデンギャラリーが選ばれました。この素晴らしい機会に、ぜひご来館ください。

文学に描かれた音楽への清澄な思いが、ヘッセの絵画にも息づいているのではないのでしょうか？

本格的なデッサンの勉強をしたことがないヘッセの水彩画ですが、そこには独特の秩序が感じられます。前述しましたように、精神的安定のために医者から勧められ描き始めた水彩画ですが、「淡々と」とも言えるかのように、外に出てはそこで目にとまった景色を描いていきました。ヘッセ独特の秩序ある形態、構図、そして色彩には、気負いのなさが感じられて心を洗われるような気がしてきます。華やかな音響を嫌いバッハを特に愛したヘッセらしく、自らの心にある純粋なものへの思いを、素直に描いていったのでしょう。観る人の心に安らぎを与えてくれるかのようなヘッセの絵には、自身は意図していないとしても、バッハ音楽に感じていた何か本質的な静けさへの憧れが、描かれているように感じられてなりません。

(文化芸術アドバイザー 小坂裕子)

いろんな催し物の最新情報がいっぱい！

割引公演ニュース・プレゼント情報も！

市川市文化振興財団ホームページ

<http://www.tekona.net/>

“てこなどっとねっと”

へ今すぐアクセス！！

